

葬送儀礼を振り返る③

大正大学文学部人文学科

教授 村上 興匡

(むらかみ こうきょう)



5. 「故人のための葬儀」と「終活」

たびたび引用されるものとして仏哲学者ジャンケレヴィッチの「一人称の死」「二人称の死」「三人称の死」がある。それぞれ、「自分の死」「大切な人の死」「他人の死」という意味で、最初の死が「死苦」、二番目が「愛別離苦」である。前節では、とくに高度経済成長期以後から、葬儀では多くの故人を知らない会葬者によってその死は「他人の死」であり、葬儀に会葬するのは義理で形式的なものとの印象をもたれるようになってきたことを述べた。最初の個人化によって、葬儀は遺族を弔問するための儀礼、すなわち二人称の死に関わる儀礼となり、一九九〇年頃からは「自分はどう葬られるのか」という一人称の儀礼に変わった。葬儀は「自己の最終表現」となり、「人生の卒業

式」とも考えられるようになったのである。

明治時代の後期くらいから葬儀費用が冗費(むだづかい)(無駄な費用)であるとの批判があったが、それは「家」や会社などが社会に対して威儀を示す儀礼であったからである。「親の葬式を出して一人前」との言葉のように喪主や遺族の社会儀礼としての性格をもっていたが、そうしたことは「見栄」「無駄」であると批判された。それに対して「自分は無宗教だから従来の仏教式の葬式は希望しない」という形での葬式無用運動が太田典礼らによって始められたのは一九六八年であったが、一九九〇年代以降にはそうした考え方が一般化してくる。

「終活」(人生の終わりのための活動)や「死に支度」という言葉が使われるようになってきたのもこの頃

からである。一九九四年には、アエラ臨時増刊『死の準備―人生の店じまいに』が出版された。自らの死への準備として、持ち物を減らしてゆくシンプルライフが推奨された。身の回りをすっきりさせ心を整理する「断捨離」(ヨガの断行、捨行、離行)とも通じる。「終活」ではモノの整理だけでなく、遺書を作るなどして自らの葬儀や死後の処理の希望を遺すことも含まれる。

「終活」の考え方の背後には、親戚や地域、会社といったしがらみを断ってきた戦後の社会変化を肯定的に評価した上で、その結果として生じた「ひとりりで死ぬこと」を引き受けていくべきとの姿勢があると考えられる。『おひとりさまの老後』(法研)を書いた社会学者上野千鶴子は、準備された「在宅ひとり死」と無縁死を区別し、ひとりりで死ぬこと自体を不幸と思う必要はないとする。おひとりさまの「死に方」として、間をおかず発見してもらえるようこまめな人間関係を作ること、遺したら遺された人が困るようなものは早めに処分すること、葬儀や墓の希望を伝えること、必要な費用をあらかじめ用意すること、などの準備をしておくことが推奨されている。

戦後、日本人は個の自立を尊重する社会を作り上げてきた。「まわりに迷惑をかけない」はそれを象徴する。

しかしながら、認知症高齢者の権利保護のための成人後見制度が必要とされることに象徴されるように、高齢単身者の増加は自己に対して完全な責任能力を持ち得ない者の増加を否応なく招来する。誰でも死ぬときはひとりであるといっても、「問題のない在宅ひとり死」を迎えるためには、ある程度人的、経済的準備が必要であり、手間もお金もかける能力のない人の葬儀をどうするかという問題になる。

6. 「無縁社会」と「三人称の死」の問題

東日本大震災以降あまり取り上げられなくなっているが、二〇一〇年からNHKが「無縁社会」として、孤独死が年間三万二千人を超えている事態を報じて大きな反響を呼んだ。当初、「無縁」とは、祀り手をなくした死者や墓を意味する無縁仏、無縁墓の「無縁」の意味が強かったが、次第に「働き盛りのひきこもり」「児童放置」「呼び寄せ高齢者」など、日本社会の血縁、地縁、社縁が機能しなくなった生者の側の「無縁」状況が問題とされるようになり、若者たちからも「他人事ではない」との声がNHKに多く寄せられた。

孤独死として処理される件数は、十年で二倍となるペースで増加して

いる。無縁死の増加は、少子化および非婚化による家族変化や、都市化による地域社会の変化、亡くなる人の高齢化や非正規雇用の増加などによって死に際して会社関係の人間関係が機能しなくなるなどの現代の社会状況を反映していると考えられるが、東日本大震災での大量死と同じく、自分とあまり関係の深くない他者が隣で死んでいるという事態は、社会における「三人称としての死」の問題を考へざるを得ない状況を生むことになる。

近年、祀り手がなく故郷の墓を片付ける「墓じまい」が問題となっており、その一方で生前契約によって、死後から弔い上げ（三十三回忌）までの儀礼執行と集合墓への埋葬を契約する永代供養墓が各地に作られるようになってきている。祀り手がなくなった墓から遺骨を合葬する伝統的な「無縁墓」とは、実は外形上の違いがない。前者が死後は孤独でなく「安心して死ねる」であるとするなら、それは死の受け止め方が違うというところにすぎないのではないか。血縁、地縁の縁によって結ばれた社会へと時代を巻き戻すことはもはや難しいため、死の受け止め方の方を変えることで「安心して死ねる」ようにすることが目指されているのだと解釈できる。

アカデミー短編アニメ賞をとった

加藤久仁生監督の「つみきのいえ」という作品はとても示唆的である。舞台になっている街は海面の上昇が進み、主人公の独り暮らしの老人は、今ある家の上に積み木のように次々と家を継ぎ足して生活している。ある日、落としたパイプを探しに潜水服で水中にもぐると、死んだ妻を介護していた家、娘が生まれた家などが次々と現れる。彼はしみじみ昔を回想するが、最後までそこに住み続ける。この「つみきのいえ」自体、積み上げてきた生涯の記憶の塊で、老人にとっての終の棲家、墓のようなものだと考えられる。現在、人口減少に対応して効率化を図るために行政機能を都市部に集めるコンパクトシティ構想が各地で進められている。葬儀と福祉が抱える問題は似ているが、家族で介護ができずに施設に入らざるをえない高齢者や、山村や豪雪地帯などを終の棲家として独居している高齢者の問題がだぶって見える。

一方で、周囲の人間が、遺された者たちの喪失の悲嘆を癒やすことは困難になってきている。葬儀が故人と遺族の私的な出来事となり、死の悲嘆は社会的には（公には）隠すべきものとなってきている。日常的に深いつきあいをしている人でないと遺族の悲嘆を癒やす助け手となるのは難しいが、その範囲は狭くなって

きている。墓無用論として批判を受けることもある「千の風になって」ではあるが、あのように大ヒットしたのは死後のイメージをきちんと持たなくなった日本人が、あの歌を通して「故人を身近に感じる」ことで、二人称の死の受け止める助けとしたという側面が強かったのではないかと考える。

7. 「葬儀」を考える

従来、仏教の葬儀は「家」の先祖祭祀の一部として、一般庶民に広がった。そもそも先祖供養というのは守るべき家産があるからこそ続いていくというところがあつて、関係がタテでつながっていくためには、それを担保する経済的な基盤が必要である。社会の構成員の多くが勤め人となってしまった状況で、本来の「家」の儀礼を続けていくのは困難をとまなう。「家」が成立しがたくなれば、「檀家」制度も同様であろうかと思われる。

現在、「終活」など死に支度を行うことが話題となったり、生前に永代供養、末期の援助（プレニード）など、様々な臨死、葬儀サービスが作られてきている。しかし、こうした「自己責任」による死への対策には限界がある。従来、日本人の9割以上が仏教式の葬儀で死を迎えていた。

仏教の教えに従って死ぬことが「安心して死ねる」ことであり、当たり前のことであるのなら、経済状況や家族の状況に関わらず、仏教の葬儀で送られることができるようになる必要がある。「無縁死者」に仏教葬儀を行う活動は多くのボランティアによって行われているが、各宗派・教団によるサポートが必要になるのではないだろうか。葬送の儀軌を整え、自己および縁者の死を受け止めるための知恵を貸すという従来からの仏教葬儀の意義は変わらないとしても、死にゆくものや家族が孤立しがちな状況、多様化した故人、遺族の状況に柔軟に寄り添える僧侶や宗派・教団としての体制を作ることがますます重要になっていくと考えられる。

(ア)

村上興匡（むらかみこうきょう）
プロフィール

一九六〇年群馬県生まれ。東京大学大学院人文科学研究科修士（宗教学）。文学博士。天台宗総合研究センター研究員。群馬県高崎市天台宗妙典寺副住職。編著書に『慰霊の系譜―死者を記憶する共同体―「社葬の経営人類学」など